

に対する非難である。トマスインはオットー四世の盾の模様を悪徳の「過剰 (unmāze)」の例としているが、長々と書かれたこの箇所から、当時既に破門され帝位を追われていたオットー四世に対するトマスインの不快が読み取れる。また、記述内容からヴァルターが次回十字軍のための献金箱とそれを置かせた教皇を非難した歌 (J 34, 14) を作ったことへの非難とされている箇所は、ヴァルターの非難に対して教皇の政策を擁護し、十字軍要請の部分へと続いていく。ここにドイツ人として教皇と聖職者をしばしば非難してきたヴァルターに対して、トマスインのイタリア人聖職者として教皇寄りの姿勢が見られる。また十字軍政策を巡って、政治の「場外」でこのような論争があったことが非常に興味深い。

『イタリア人客』では具体例としてハンニバルやアレクサンダー大王といった古代の出来事や人物も用いられているが、それ以外の記述についてはほぼトマスインが同時代人として何らかの方法で聞できたと思われる時期に集中している。様々なことの中からこれらが、歴史の記録としての厳密さとは無縁の状況下で、作者の用途に応じて恣意的に選び出されて、自由に書きとめられたのである。歴史の記録としては非常に不安定な史料であるが、このようにして記述されたものは、一人の同時代人の「世論」の史料として有用であり非常に興味深いものとなっている。

〈考古学部会〉

若狭地方における縄文時代遺跡の立地と周辺環境

渡 邊 千 尋

縄文時代の遺跡がどのような環境下に営まれ、また、遺跡間相互の関係がどのようなになっていったのかを把握することは、縄文時代研究において、重要かつ基本的な課題である。しかし、従来の研究の多くは、遺跡をめぐる空間的な属性に対する配慮に欠け、二次元的な把握に終始するものであった。

本研究では、一九九〇年代後半から、日本でも考古学への応用が試みられ、一定の成果を収めてきている地理情報システム (GIS) の解析手法を取り入れ、縄文時代遺跡の立地と周辺環境との関係にアプローチする。GISの解析モジュールを用いることで、時空間データに対する定量的な分析が行なえ、遺跡相互、地域相互の比較が可能になると考えられる。また、多量の時空間情報を扱えるため、従来の研究方法では不可能であった、詳細かつ具体的な分析が可能になると考えられる。

限られた地理的空間である若狭沿岸地域を対象地域として抽出し、縄文時代遺跡の存在がまとまって確認されている、三方五湖周辺、小浜湾周辺、舞鶴湾周辺の三地域を設定し、分析を行なう。それぞれの地域は、南北に一八・五km、東西に二二・五kmである。『福井

県遺跡地図』（福井県教育委員会、一九九三）および『京都府遺跡地図（第三版）第一分冊』（京都府教育庁指導部文化財保護課、二〇〇一）に報告されている縄文時代遺跡をもとに、一五遺跡、一六遺跡、一九遺跡をそれぞれデータベース化した。遺跡数が限られるために、時期細分を行なうと全体の傾向が把握できなくなる恐れがあり、今回は、縄文時代を通じての分析とする。また、当該地域は、古環境復元がきわめて難しい地域であり、現地形のデータを利用し、の分析とする。

「標高」「傾斜角」「傾斜方向」を解析する基本的なGISの分析モジュールを用い、縄文時代遺跡の立地を多角的に分析する。まず、標高に関して、解析結果から導き出された基本統計量を比較すると、三方五湖周辺地域が、三地域のなかで高低差に富んだ地形を有していることが指摘できる。また、対照的に舞鶴湾周辺地域が高低差にやや乏しいことが指摘できる。一方、縄文時代遺跡の立地された箇所に関して、三方五湖周辺地域は他の二地域に比較し、やや高低差に富んでいることがうかがえ、多角的な土地利用が想定できる可能性がある。ただし、三地域ともに意図的に標高の低い場所に遺跡を営んでいることは共通である。

傾斜角度に関しては、地域全体の傾向に大きな差異はない。遺跡立地箇所に関して、小浜湾周辺地域では、他の二地域に比べ、より傾斜角度の緩やかな土地を選んでいる傾向を解析による基本統計量から指摘することはできるが、三地域がともに、傾斜角度が五度以

内の緩やかな土地を選択し利用していたあり方がうかがえる。傾斜角度が、物理的に人間の活動を制約している側面が強いためと思われる。

傾斜方向に関して、地域全体に特徴的な傾向を読み取ることではできない。縄文時代遺跡の立地箇所に関して、三方五湖周辺地域では、明らかに西向きの傾斜方向を意図して遺跡が形成されていることがうかがえる。山地の西裾に形成されている藤井遺跡などのデータが反映されているものと思われる。小浜湾、舞鶴湾周辺地域では、やや北向き、北東向きを嫌う傾向が見られるものの顕著ではない。これらの傾向の意味するところは、今後考古学的な検討を含め、文化的な意味を明らかにしていかなければならない。

続いて、各遺跡からの移動コストを計算する。従来までの研究では、遺跡から同心円を描き、活動領域などを算定してきたが、移動コストは、地形の傾斜などに基づき一定の負荷をかけ、同心円をより実際の地形に即したかたちで歪めたモデルである。移動コストが低ければ、それだけアクセスの容易な場所になり、高ければその逆である。

個々の遺跡から求めた移動コストを、GISの画像演算のモジュールを用い、加算することで、それぞれの地域ごとの各遺跡からの移動コストの総和を出し、それぞれの地域で各遺跡からのアクセスが集中する箇所、すなわち遺跡間の重心を求めた。遺跡間重心は、どの遺跡からもアクセスが集中するため、その地域において重要な意

味を持つ場所になると考えられる。遺跡間重心は、三方五湖周辺では鱈川の沖積平野に、小浜湾周辺では北川・南川下流域の小浜平野に、舞鶴湾周辺では由良川流域に存在する。これらの地域は、別個に求めた海、湖、川などの水域環境に対するアクセスが容易な場所、すなわち水域環境への移動コストが少ない場所と相関が強いことが明らかになった。つまり、水域環境へのアクセスを意識して、遺跡の立地がなされていたわけである。

しかし、水域環境へのアクセスに適した場所であっても、遺跡の形成されない場所もあり、遺跡立地に関してその他の要因が働いていることも否定できない。遺跡間の関係におそらく起因する社会的文化的な要素が働いていたのではないかと考えられる。今後は、遺物の分析などを通して、考古学的な見地から個別具体的に論じていく次第である。

装飾付大刀以後 〈七世紀以降の大刀の様相〉

持 田 大 輔

本発表は、正倉院所蔵の大刀と出土品とを比較するとともに、文献史料を用いて所有者の階層性について考え、どの時期まで遡ることができるかについて検討する。これにより六世紀後半から七世紀初頭、古墳時代後期における「装飾付大刀」研究への応用をはかることを目的とする。

「装飾付大刀」は、全面を金銀金銅で装飾した古墳時代後期に流行する遺物として定義されている。この大刀は七世紀初頭において生産が停止する。装飾付大刀の代表として知られているものに頭椎大刀、双竜環頭大刀などがあるが、これらに代わって圭頭大刀、方頭大刀が製作されるようになる。これらの大刀の編年については、佩用金具が、単脚足金物・双脚足金物へと変化し、圭頭から方頭へと変遷する様子が明らかになっている。このうち、双脚足金物を装着した方頭大刀が、「黒作大刀」などと呼ばれ、正倉院に伝来している。

現在正倉院には計五四口の大刀が伝来している。これらの大刀は『東大寺献物帳』内に記載があるが、藤原仲麻呂の乱に際して、武器武具類が出蔵されており、「金銀鈿唐大刀」一口が確実に記載されているものと一致している唯一の物である。他の大刀については、どの時期にどのような過程で戻されたものか明らかではない。しかし、その中の「破陣楽大刀」「武王大刀」など三口には「天平勝寶四年四月九日東大寺」と、七五二年の紀年銘があり、他の大刀についてもこの大刀の様式と大差ない。従って納められている大刀は八世紀なかばの様相と考えて差し支えない。正倉院所蔵の大刀は、外装の素材より三種に大別することができる。金銅唐大刀、金銅莊大刀、黒作大刀である。

養老律令の衣服令第十九、武官礼服・朝服条によると、四等官のうち、上位二官にあたる「督」「佐」は金銀莊大刀を、下位二官に